



## 70年に一度の開花 — 岩瀬キャンパスの竜舌蘭<sup>りゅうぜつらん</sup>

この6月は空梅雨<sup>からつゆ</sup>気味に推移し、7月に入り猛暑日が続き、月末から鎌倉辺りも集中豪雨と、目まぐるしいこの夏の天気でした。そんな時期、岩瀬キャンパスの本館正面の風景に嬉しい異変があった報せが届きました。

日常的に見ている岩瀬キャンパスですが、これまでは玄関脇に「ああ、ユッカの株がある」と、その程度にしか目を向けませんでした。況<sup>ま</sup>してそれを竜舌蘭と呼ぶことも知りませんでした。

その蘭がです、気がつかないうちに3階にまで届くほど太く堅固な茎を伸ばし、下の方から上の方へと、小さな緑のバナナの房のようにたわわにつけた蕾から鮮やかな黄色の花弁を開かせたのです。

『新牧野日本植物図鑑』（北隆館）によれば、竜舌蘭は、「メキシコ原産の常緑の多年草で、葉は多数集まって根生し、先端は鋭く尖っている。数十年を経た後、高さ6～9メートルに達する円柱形の茎を出し、多数の黄色の花を咲かせる。日本名は葉形を竜の舌に<sup>たと</sup>喩えたもの」とある。テキーラ酒は、この葉のしぼり汁を蒸留したものだそう。

このことを紀子先生にお知らせしたところ、こういうお話を伺いました。松本生太先生は、兎も角自宅の庭やキャンパスに何でも種を蒔いたのだそうです。お八つや夕食に食べた桃、ビワ、カボチャ、みかん・・・、それは何でも。千枝子夫人は、微苦笑しながら眺めておられたそうですが、息子たちからは「また親爺の種蒔きが始まった」と馬鹿にされながらも全く意に介さず、「蒔かなきゃ、芽は出ん」とおっしゃって。

もしかしたらこの竜舌蘭は、終戦直後の岩瀬キャンパスの開設の頃、生太先生ご自身が蒔くか、植えたかしたものなのかも知れません。今年で戦後72年が経つわけですから、そう想像したとしても、別段不思議なこととも思われません。

早速神奈川新聞が取材にきてくれ、翌日には卒業生や市民の方々が見学に来て下さいました。

先生は、「一年を思う者は花を植える 十年を思う者は樹<sup>き</sup>を植える 百年を思う者は人を育てる」を座右の銘になさいましたが、こうしてみると、花だって70年待たなければ開かない花があるのですね。

仏教の唯識説<sup>ゆいしきせつ</sup>という学説に「種子<sup>しゆじ</sup>」という言葉を使った興味深い経験論があります。種子とは、文字通り蒔かれる種のことです。善い経験を身に受ければ、それが種子となって新しい善い経験として実を結び、悪い経験を身に受ければ、それが種子となって新しい悪い経験を生み出す。どこにどのような色を塗ろうとするのかという意図や作為以前に、香<sup>かう</sup>を焚<sup>た</sup>

いた<sup>かお</sup>香りが衣服に自然に染み込むように、生きる姿勢、遣<sup>つか</sup>う言葉、抱<sup>いだ</sup>く価値観何もかも、祖父母が醸し出す雰囲気<sup>ふんいき</sup>が知らず知らずのうちに親の中へ、親が醸し出す雰囲気<sup>ふんいき</sup>が知らず知らずのうちに子の中へ、そして孫の中へと沁み込んでいくといわれています。それを唯識説では「薰習<sup>くんじゅう</sup>」ともいっています。

「蒔かなきゃ、芽は出ん」、如何にも教育に生涯を費やされた生太先生らしいエピソードだと思いました。教育は、人間の成長を信じること、種さえ蒔いておけば、仮に直ぐに芽が出なくとも、十年後見事に花を咲かせることだってあるものです。

昔の友人たちがもう名誉教授になったり学長になったりするものですから、そんなことが機縁になって、近年定期的に研究会を開いているのですが、この7月末の会合の折、行きがけにスマホで撮った写真を見せたところ、皆、異口同音に、「これは素晴らしい、福井さんきつといいことあるよ」といってくれました。

[>前のページへ戻る](#)